



TITLE:

中国雲南省シーサンパンナにおけるマイノリティ言語の維持：アカ族の村落における言語使用の現状から

AUTHOR(S):

陳, 暢

CITATION:

陳, 暢. 中国雲南省シーサンパンナにおけるマイノリティ言語の維持：アカ族の村落における言語使用の現状から. 京都大学言語学研究 2009, 28: 1-31

ISSUE DATE:

2009-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/141800>

RIGHT:

中国雲南省シーサンパンナにおけるマイノリティ言語の維持 —アカ族の村落における言語使用の現状から—

陳 暢

I はじめに

中華人民共和国においては、漢族が全国民の90%以上を占め、漢族を中心とする政策が実施されてきた。そうした状況から、マイノリティである少数民族の人々は大きな影響、変容を受け、生活の漢化が進むと考えられてきた。しかし本論文が対象とする、雲南省シーサンパンナ¹に居住するアカ族²は、日常生活の中でアカ族としてのアイデンティティを力強く維持していた。それはいかにして可能なのだろうか。本論文は、日常の言語実践の場に注目し、彼らの言語が維持される状況の一端を明らかにするものである。

現代の社会状況において、英語や漢語などの大規模言語とマイノリティ言語は接触を避けられない。マイノリティである人々は、優勢な言語にいかに対応するかの判断を迫られる。Laponce (2005: 21)はカナダにおけるマイノリティ言語と英語の関係を取り上げ、マイノリティ言語の話者が優勢言語を身につけることで、逆に生存するために有利になるという側面があることを指摘し、さらにマイノリティ言語は読み言葉や書き言葉として使われなくなっても、最終的には最も簡略化された形で、グループのアイデンティティや民族の所属のマーカールとして残されると推測する。社会言語学においても、特に優勢言語とマイノリティ言語の使用の切り替えはエスニシティが表出する場として注目されている(中川 1996, ミルロイ 2000, 崎山ほか 2002)。

ここで重要となるのは言語が実際に話される場である。本論文が注目するのは、多言語使用地域における具体的な言語使用状況である。本論文でとりあげるアカ族の人々をめぐるのは、中国国内において民族誌的、歴史学的研究が蓄

¹ 公式名は西双版纳傣族自治州であり、本論文ではシーサンパンナと称する。

² 公式名称は「ハニ(哈尼)族」であり、シーサンパンナに住む人々は漢語で「愛尼」と呼ばれることもあるが、本論文では調査対象の人々の自称である「アカ族」で表記を統一する。

積されてきた(雲南省編集委員会 1982, 雲南省勐海県地方誌編纂委員会 1997, 西双版纳傣族自治州教育委員会 2002, 門図 2002, 楊忠明 2004 など)。これらの研究では、彼らの言葉であるアカ語(ハニ語)と漢語という二言語使用に言及されることが少なくない(雲南省勐海県地方誌編纂委員会 1997, 西双版纳傣族自治州教育委員会 2002, 楊忠明 2004, 黄行 2000)。特に黄行(2000: 234)は「ハニ族などの地域では、二言語化(バイリンガル)の進行に伴い、少数民族言語の社会機能が更に低下する」と述べている。

このように、マイノリティである彼らの言語使用圏は、漢族の影響下においてさらに縮小していくという議論が多く見られる。徐世璇(2001)が論じるように、マイノリティ言語は「危機に瀕した言語」として扱われていく。この背景には、少数民族が徐々に漢化していくという見方があり、中国の少数民族を対象とする中国国外の研究においてもしばしば漢化がよく取り上げられてきた(長谷川 1998, 毛里 1998 など)。

しかし、マイノリティの現状を捉えるためには、マジョリティからの影響という観点だけでは不十分である。中国のアカ族は、その歴史の中で常に他民族との関係を持ち続けていた。過去にも例を見ないほど、漢族や漢語との接触が広まった現代においては、彼らのアイデンティティの問題はより大きくなるといわれる(McKinnon 1997: 101-105)。本論文ではこれまでの、「マジョリティである漢族の影響下で変容するマイノリティ」という図式を超えて、アカ族自身の視点から言語使用の現状を検討する。そのために、アカ族に関する先行研究では詳細に触れられることのなかった、実際にアカ語を使用する場に注目する。

本論文では、まず中華人民共和国成立後、アカ族がハニ族という少数民族の下位グループに編成される過程を踏まえた後、アカ族とアカ語をめぐる状況を、彼らの日常生活における他民族との関係を軸に検討する。そして中国の少数民族言語政策や、現在のアカ族の生活環境におけるアカ語の位置づけを明らかにする。具体的には、フィールドワークで収集した日常生活と会話場面の分析から、彼らが漢語の影響下にありながらも、アカ語の使用を通じた日常生活を継続している点を浮き彫りにする。さらに彼らの言語使用とエスニシティの維持との関連について考察する。

II シーサンパンナのアカ族

1. シーサンパンナのアカ族とは

本論文で対象とするアカ族は、中華人民共和国成立後、民族調査隊の調査によって、ハニ族の下位グループとされた。中国のハニ族の総人口は 1,439,673

人(2000年国家统计局発表)で、雲南省の中部から南部にかけて分布している。少数民族の総人口は中国の総人口の8.7%、9045万人であるが、彼らはその中でも少数を占めるにとどまっている。彼らは古代の「羌」と呼ばれた人々をルーツとするといわれ、そのうちアカ族は10世紀に瀾滄江の「勐勐王国」(現在のシーサンパンナ周辺)に移住したとされる。シーサンパンナのアカ族は全州に約18万人が散在し、同州ではタイ(傣)族³に続いて2番目に人口の多い民族である(景洪県地方誌編纂委員会 2000)。

本論文では、筆者が2004年から2006年にかけて断続的に調査を行ったアカ族の集落、シーサンパンナの勐海(モンハイ)県巴達(バダー)郷⁴曼来村の事例を取り上げる。勐海県には約59,000人のアカ族が居住し、県内総人口の21%を占める(雲南省勐海県地方誌編纂委員会 1997)。曼来村が所在する巴達郷においては、2004年末の時点でアカ族は総人口の42%にあたる4,010人、またブーラン(布朗)族が52%、漢族とその他の民族が6%を占めている。

曼来村の筆者が調査した曼来老寨は人口が487人(2004年)、約100年の歴史を持ち、ほとんど全員がアカ族である。近隣の集落には、タイ族や漢族をはじめとする他の民族も居住している。各集落のアカ族は、親族・血縁関係をはじめ、相互の友好的な共存と交流によって、強い社会的つながりを有している。

村での聞き取りによると、彼らは伝統的には移動型焼畑農業を行い、主に陸稲を栽培していた。またケシの栽培も行われていた。中華人民共和国の成立後、1950年代から土地改革によってケシの栽培が禁じられ、人民公社における集団労働制の下で、水田の開発が進められた。その後1980年代から生産責任制が始まり、自由な生産活動が再び可能になった。現在ではほとんどが定住型の農業を行い、水稻を栽培し主食とするほか、焼畑でのトウモロコシや野菜の栽培も続いている。さらに1990年代以降は、改革開放による市場経済の発展の下で、行政の主導によって商品作物であるサトウキビの栽培や茶の栽培が拡大しており、人々の重要な現金収入源になっている。各世帯は鶏、豚を飼育しているが、家畜の保有数は世帯によって大きく異なる。普段の食料はほぼ自給自足であるが、自分の家で作られていない野菜、儀礼以外に使用する豚肉、日常用品などは毎週開かれる市場や、都市で購入する場合もある。

さらに近年では男性と若い女性を中心に、村外への出稼ぎ者が増加している。

³ 正確にはタイ・ルーである。シーサンパンナの少数民族の中では人口が一番多く、約28万人を有する(景洪県地方誌編纂委員会 2000)。本論文では、タイ族と表記する。

⁴ 筆者が調査を終えた2006年に、バダー郷は正式に隣接している西定郷と合併し、西定郷と呼ばれるようになった。

出稼ぎ先はタイ、ミャンマー、中国国内の各地である⁵。最も、出稼ぎは一生続けるものではないと考えられている面もある。出稼ぎから帰って来たある男性は、「私はいろいろと考えて帰って来た。外にいるのは長い目でみたらよくない。親も年だし、彼らのそばで面倒を見る人も必要だから」と語っている。若い出稼ぎ者は多いが、外の世界では自分の居場所を見つけるのが難しい。したがって、アカ族の村においては、土地を持ち、経済的に安定できるような村の営みが重要な選択肢にもなっている。

2. アカ族と周辺民族との関係

楊忠明（2004）によると、アカ族は9世紀ごろから20世紀初頭まで、タイ族の封建領主「召片領」の統治下に置かれた。村での聞き取りによると、曼来村周辺のアカ族は、官吏が任命したタイ族やプーラン族によって管理されていた。中華民国時代には国民党が「保甲長制」を設置し、タイ族を通じた管理を行った。1950年の中国共産党による解放まで、曼来村のアカ族は自分の土地をほとんど持たず、タイ族やプーラン族から土地を借り、毎年現金や作物を納めていた。また、タイ族の祭りなどには参加義務が課せられ、祝い品を持参する必要があった。逆にアカ族の祭りの際には、タイ族を大事な客として招待したりしたという。そのため、村の老年層にはタイ語を話すことのできる者も多い。現在でも、タイ族との農具の貸し借り、大きな祭りへの招待などは頻繁に行われているが、通婚は極めて少ない。また、プーラン族に対しては、かつてアカ族との間で土地をめぐる争いがあったため、今でも彼らを「黒い人たち」と軽蔑的な表現で呼び、積極的な交流を避けている。

アカ族と漢族との頻繁な接触がはじまったのは、共産党政権が樹立された1950年代以降である。それ以前の漢族との関係は、塩や生活雑貨を売りに訪れる貿易商人との接触に限られていた。中華民国時代には、集落から3キロ離れた西定⁶などに国民党軍が駐屯していたが、頻繁な接触はなかったという。この時期と前後して、戦争のため中国各地から逃れてきた漢族が集落を形成した。さらに1950年代以降、漢族の民族工作隊及び水利兵団がアカ族集落に出入りするようになった。また交通網の整備や若者の出稼ぎによって、村の外部で漢族と接触する機会も多くなった。

⁵ 国外への出稼ぎは茶などの農園で働くことが多く、中国国内では、サービス業や工事現場が多いという。いずれにしても親戚か、集落の出身者とのつながりに頼っていくが、十分に教育を受ける機会を得ることができなかったために、収入の低い仕事しか見つからない場合が多い。

⁶ 西定郷政府所在地であり、市場等もある大きな町で、集落から3キロ離れている。

現在、集落の生活には漢族の影響が隅々まで及んでいる。かつて集落の入り口に必ず存在した「龍巴門⁷」の多くが建てられなくなり、人々にその場所の記憶が残るのみとなっている。かつては日常的に手作りの藍染の衣装を身につけている姿が見られたが、今日では、一部の年長者、そして儀礼の際にしか見られなくなっている。食事においては、漢族社会から入ってきた加工食品が欠かせないものとなっている。さらに、かつては家畜や山での狩猟が重要なたんばく源であったが、近年は狩猟活動が政府に禁じられ、獲物の角が飾られていない家が多い。また漢族の祝日もよく祝われるようになっている。

以上のようにアカ族は、かつてはタイ族をはじめとする支配階級に対して、また現在は政治経済や文化において主導権をにぎる漢族に対しても、マイノリティであり続けてきた。そしてこうした多民族状況の中を生き抜くことが必要とされてきたのである。

III アカ語をめぐる状況

1. アカ語とは

アカ語は中国では、ハニ語の下位方言とされる。ハニ語はシナ・チベット語系、チベット・ビルマ系諸語に属し、ハーヤ（哈雅）方言、ビーカ（碧卡）方言、ホァーバイ（豪白）方言の三大方言に大別される。ハーヤ方言は、最も話し手が多く、方言内部の差も大きいため、さらに下位方言のハニ次方言⁸とヤーニ（雅尼）次方言に分けられ、加えてそれぞれ若干の土語⁹に細分される（西田 1988: 137-142）。シーサンパンナのアカ族はヤーニ次方言のシーサンパンナ格朗和土語を使っている。中国における言語学的研究としては、ハニ語についてまとまったものがあるが（戴ほか 1995）、アカ語についてはほとんど調査が行われてこなかった。調査地では、アカ語のことをaqkaq daoq¹⁰（アカド）という。アカ語の基本構造はSOV型であり、漢語のSVO型とは異なる。

中国各地の少数民族言語に対しては、中国科学院と中央民族事務委員会の主導による民族言語調査が 1950 年代から行われた。雲南省では 1952 年から中国社会科学院言語研究所の協力の下、言語調査が始まった。また 1957 年に、雲南

⁷ 集落の入り口に設置される木造の門であり、上部に魔除けの護符が設置されている。外部からの魔物や災厄の侵入を防ぐ神聖なものと考えられている。

⁸ 中国の言語学で用いられる用語で、大きな方言グループの中に含まれる下位方言を表す。

⁹ 土語とは、次方言の下位分類である。

¹⁰ 原則として、以下に本論文で示すアカ語は中国で作成された正書法を使用して表記する（楊沢華 1995）。この正書法は本論文の調査地域のアカ語に基づいて作られたものではないが、他の正書法が確立されていないため、便宜的に使用する。

省少数民族語文指導工作委员会と教育庁は少数民族言語調査隊を省内の各地に派遣した。同年 10 月貴州省で開かれた民族文字に関する会議で、少数民族の言語を、漢語の拼音（ピンイン）方案をもとにしてローマ字表記するよう定められた。

これらの調査と会議の結果に基づき、ハニ語を含めた 6 つの言語に対するローマ字による表記法が制定された。その中で、ハニ語ではハーヤ方言とビーカ方言の二種類の表記法が創られた。ハニ語の表記法は 1957 年以降、雲南省での試用が始まり、後にビーカ方言方案は中止になり、ハーヤ方言方案は紅河哈尼族彝族自治州で普及が進められた。これは文化大革命による中断時期を除いて、現在まで継続されている（岡本 1999）。一方シーサンパンナでは 1981 年 5 月、シーサンパンナ人民ラジオ局のアカ族のメンバーを中心として、ハニ語ハーヤ方言のヤー二次方言のアカ語の表記法が作成された。これは勐海県格朗和哈尼族郷のことばを基準に、ハニ次方言の文字方案を参考にして作成されたものであり、ラジオ局の書類作成に採用された（楊忠明 2004）。しかしこうした表記法は、ハニ族・アカ族の政府関係者とメディア関係者の一部の間に普及するだけにとどまった（雲南省勐海県地方誌編纂委員会 1997: 118）。つまり、集落の日常生活においては、アカ語は未だに文字をもたず、口頭でのやりとりが中心になっているといえる。

2. 学校における漢語教育の重視

ここではアカ語が教育の現場においてどのように位置づけられているのかを明らかにする。調査地周辺で学校教育が本格的に普及したのは 1950 年代以降である。シーサンパンナの自治州政府は少数民族を主に募集する学校やクラスに対して、様々な優遇政策を実施し、民族小学校を 1955 年秋までに、26 ヶ所から 34 ヶ所に増やした。そのうち、ハニ族の小学校は 5 ヶ所である（菅 1998: 221）。1966 年、文化大革命に入ると、優遇政策が中止され、民族語の授業や民族学校そのものが廃止され、多くの少数民族教員が迫害を受けた。

1980 年代以降、少数民族を対象とする教育は再び重視されるようになった。現在の中国の義務教育法によると、少数民族を主に募集する民族学校では、その民族の言語、文字による教育と共通語である漢語を用いた教育が併用されることになっている。また文字を持たない民族は、その民族の言語を補助的に使いながら漢語での教育を行う（中国社会科学院民族研究所ほか 1993）。シーサンパンナでは、多数を占めるタイ族に対し、タイ語と漢語による二言語教育が 1993 年に、110 箇所の学校で行われている（菅 1998: 235）。勐海県は 1987 年に、ほとんどの学生が少数民族である第二小学校を民族小学校と改名した。また

1984 年から第四中学校に少数民族クラスを設置し 1988 年に民族中学校に改名した。民族小学校では基本的に全国共通のカリキュラムを使用するが、6 年生では毎週一コマのタイ語授業が設置されている（菅 1998: 222）。また 1985 年から寺院教育を受けているタイ族やプーラン族の児童を学校に入れるための特別クラスが設けられ、仏教寺院においても学校教育のクラスが設置された。

これに対して、アカ族に対してはアカ語によるカリキュラムは組まれておらず、アカ語は漢語での授業の理解を促すために補助的に使われているに過ぎない。またアカ語の表記法も教えられていない。ここでは曼来村の曼来小学校の学前班¹¹の事例から具体的に見てみよう。調査した学前班の生徒は 22 人で、女子は 12 人、男子は 10 人である。漢族の子供が 2 人いる以外はすべてアカ族の出身である¹²。5 人の教師のうち 4 人はアカ族で、1 人は漢族である。授業で使用するのは、雲南省共通のテキストであり、漢語標準語の習得のために書かれたものである。以下の事例ではアカ語を交えながら漢語の教育が行われている様子が観察できる。ローマ字表記と和訳で下線を引いた部分がアカ語である。

＜事例 1：2004 年 9 月 23 日、学前班の授業の一場面＞

発話者	原語	和訳
①教師	那么，装书的包叫什么？	【テキストに書いてあるカバンの図を指して】それでは、本を入れるカバンのことを何と呼びますか。
②生徒たち	书包。	【一斉に】通学カバンです。
③教師	书包里面装的什么？	カバンの中に何が入っていますか？
④生徒たち	铅笔。	鉛筆です。
⑤教師	还有呢？	他には？
⑥生徒たち	文具盒。	筆箱です。
⑦教師	这里有两个人。 <u>Tedeq aqjeiq e caolhaq nga?</u> （・・・：アカ語）	ここに二人がいます。 <u>彼らはどんな人？（・・・：アカ語）</u>

¹¹ 義務教育に入る前に、準備勉強として小学校に設置されるクラスのことである。

¹² ここで取り上げる小学校はアカ族の集落にあったため、アカ族の生徒がほとんどとなっている。勐海県には、複数の民族が混合している学校のほうが多い。

⑧生徒たち	<u>Aqbulssaq.</u>	<u>女の子。</u>
⑨教師	<u>(・・・:アカ語)</u>	<u>(・・・:アカ語)</u>
⑩生徒たち	<u>Aqbulssaq.</u>	<u>女の子。</u>
⑪教師	<u>Lavqbeeq daoq nai jania mal</u> <u>laq?Aqbulssaq lavqbeeq daoq nai</u> <u>aqjeiq kul nga? (・・・:漢語</u> <u>標準語)</u>	<u>漢語で言える?女の子を漢</u> <u>語でどう言う? (・・・:</u> <u>漢語標準語)</u>
⑫生徒たち	女孩。	「女孩」です。
⑬教師	对。那么, 这里把和你们差不多 大的人叫女孩。	そう。ここで、あなたたち と同じぐらい年齢の人を 「女孩」と言います。
⑭生徒たち	女孩。	「女孩」です。
⑮教師	那么、 <u>He aqjeiq kul nga?</u>	それでは、 <u>これは何と言</u> <u>う?</u>
⑯生徒たち	<u>Aqlissaq.</u>	<u>男の子。</u>
⑰教師	<u>Aqlissaq lavqbeeq daoq nai jania</u> <u>mal laq?</u>	<u>男の子を漢語でどう呼ぶ?</u>
⑱生徒たち	男孩。	「男孩」です。
⑲教師	对, 很好。跟我读。男孩。	そう、素晴らしい。私につ いて読んでください。男孩。
⑳生徒たち	男孩。	男孩。

注 1) (・・・:) は本論文では、聞き取ることができなかった発話内容を表す。言語の種類が判断できる場合、括弧の中で表明している。

2) 【】は、状況の説明を示す。

3) 教師は 27 歳の男性、アカ族である。

ここで観察されるのは、アカ語を補助言語としながら、漢語を話せるように教師が生徒を指導している様子である。例えば、⑧と⑩はアカ語の回答であり、それに対して、教師は⑪によってアカ語で漢語の回答を求めた。こうして、生徒は⑫では漢語で回答した。また、⑦と⑮もアカ語と漢語を交えて漢語を指導するケースである。ほとんどアカ語しか話すことのできない子供たちに、本格

的な漢語教育への移行に向けた準備をしている段階である。筆者が参加した別の授業においては、学前班とは異なり、小学校の一年生以降ではほとんどアカ語の使用は見られなかった。担任の教師は「45分の授業時間中に生徒が明らかに分からない時はアカ語を使うが、できるだけ標準語を使う」と意識して教えている。また、他の教師も「漢語ができれば、都市へ行っても、どこへ行っても仕事ができるし、裕福な生活ができる」と語っている。

こうした現状からは、二言語教育を原則とする政策とはうらはらに、実際にはアカ族の教育現場では漢語の習得が重視されていることがわかる。岡本（1999: 341）はこの背景に民族語教育を担う教師の不足があることを指摘している。いずれにせよ、漢語は生活のために必要な言語とみなされ、教育現場ではアカ語はよりインフォーマルな言語として位置づけられていることがわかる。

IV 集落におけるアカ語使用と漢語の浸透

1. 言語調査票からみる言語状況

次に、集落での言語使用の現状をみていきたい。人々のアカ語能力を明らかにするために調査票を用いた個別の面接調査を行った。調査期間は2004年8月から2005年10月である。調査票は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（1966）における「アジア・アフリカ言語調査表」のA項目（200語）とB項目（300語）からなる500語の基本語彙を元に作成した。これには身体、食、居住、道具、交通手段、動物、植物、自然存在、親族、時間、数詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、挨拶語、その他といったカテゴリーの基本語彙が含まれる。

筆者は村のアカ族（40代、男性）を調査助手として、次頁の表1に示す各世代のインフォーマントに面接を行った。インフォーマントは、性別（F：女性、M：男性）、実名の頭文字、年齢を順番に表記した記号を用いる。まずインフォーマントに対して、筆者が漢語標準語を用いて調査票の語彙を発音した後、同じく漢語標準語で「これをアカ語で何と言うか」と質問する。インフォーマントが質問に答えられない場合、漢語方言を用いて調査票の語彙を発音し、漢語方言で質問を行う。それでも質問に答えられない場合、助手にその語彙の意味をアカ語で説明してもらい、対応する回答を得るという方法を用いた。

その結果を表2にまとめ、500の語彙に対し、対応するアカ語を答えられた数、質問に対して漢語で答えた数、どちらの言語でも答えることができなかった

た¹³数を集計した¹⁴。また漢語で理解することができた語彙数も示した。さらに図 1 には、回答した言語の比率をインフォーマント別に整理した。

表1 言語調査票インフォーマント一覧

番号	記号	性別	年齢	職業
1	FQ13	女性	13 歳	小学生
2	FB18	女性	18 歳	家事手伝い
3	FP33	女性	33 歳	農家、家事手伝い
4	FT42	女性	42 歳	農家、家事手伝い
5	FA53	女性	53 歳	農家、家事手伝い
6	FJ66	女性	66 歳	農家、家事手伝い
7	MW13	男性	13 歳	小学生
8	ME21	男性	21 歳	出稼ぎ労働者
9	MD22	男性	22 歳	会社員
10	MG31	男性	31 歳	学校職員
11	MX42	男性	42 歳	農家
12	MI55	男性	55 歳	農家
13	MM61	男性	61 歳	農家
14	MS75	男性	75 歳	農家

¹³ 質問内容の意味は理解できるものの、その意味に対応する単語を思い出すことができなかったという意味である。

¹⁴ 言語調査票の回答において、答えられたアカ語が複数である場合、また筆者の漢語発音を聞き間違えて、回答を間違えた場合が若干ある。後者に対して、筆者は電話で確認して訂正を行った。

表 2 言語調査票を用いた調査に対する回答の内訳

番号	記号	アカ語	漢語	回答できなかった語彙	漢語で理解できた語彙
1	FQ13	454	2	44	500
2	FB18	452	7	41	500
3	FP33	483	1	16	487
4	FT42	484	5	11	500
5	FA53	486	2	12	464
6	FJ66	492	4	4	376
7	MW13	474	5	21	500
8	ME21	460	9	31	500
9	MD22	432	13	55	500
10	MG31	466	13	21	500
11	MX42	490	1	9	500
12	MI55	489	5	6	486
13	MM61	494	2	4	491
14	MS75	497	1	2	463

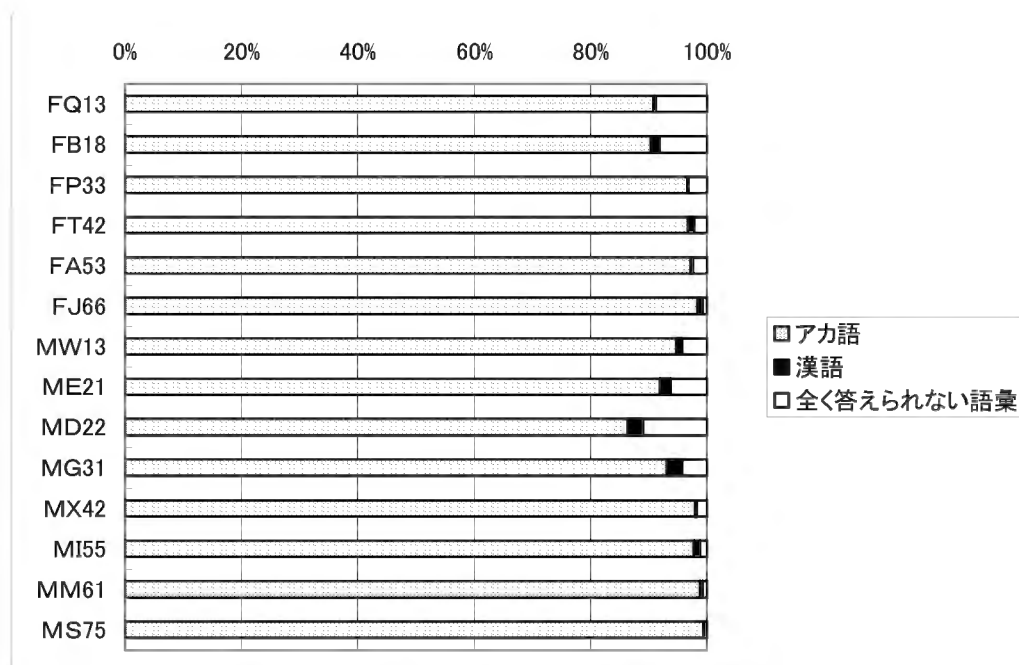


図 1 言語調査票を用いた調査に対する回答の内訳(n=500)

これらの調査結果からは、彼らが高いアカ語の基礎能力を有していることが読み取れる。図 1 にも示すように、1 人を除き質問の 90%以上に対してアカ語の基礎語彙を回答することができた。世代間では、年齢が上がるにつれ、アカ語の回答率が高い傾向がみられるが、若い世代も高い回答率を維持している。調査者の漢語による質問のほとんどを理解できていることから、漢語能力も比較的高いことが指摘できる。これによって、彼らが少なくとも漢語とアカ語双方の基礎語彙を理解できることが明らかになったといえる¹⁵。

次に、アカ語で回答できなかった単語について詳しく見ることで、アカ語がどれだけ漢語の影響を受けているのかを明らかにする。「アカ語で何というか」という質問に答えられない場合、それに対応するアカ語語彙はないか失われた可能性がある。インフォーマントのうち最年長で、最もアカ語能力が高いと考えられる MS75 を例にとると、彼が適切なアカ語を回答できなかったのは 3 つである。そのうち、1 つは漢語で回答し、残り 2 つは漢語とアカ語のどちらでも回答することができなかった。

全く答えられなかったのは「もし」である。これに関しては、漢語で「もし」を表す「如果」のみならず、仮定の意味を表す単語や表現がないか様々な形で質問を試みたが、対応するアカ語の回答を得ることはできなかった。これは、アカ語の仮定の表現において中国語の「如果」に直接対応する言葉はなく、

Haoqniyul	keel	nal-aq, ngal	jil zaq ma.
おかず	おいしい	ならば 私	食べよう

というように接辞を用いた形で用いられることが多いため、回答できなかった可能性がある。

次にインフォーマント全体で、どちらの言語でも答えることができなかった語彙の傾向を見てみよう。500 個の語彙を品詞で分類し、そのカテゴリーごとに答えられなかった語彙数をまとめたのが表 3 である。身体名称と動詞、特に動作を表す動詞は優勢言語の借用が起きにくいとされる（早稲田 1989: 326）が、特に FQ13、MD22 ではこれらのカテゴリーに対し、アカ語の語彙を答えること

¹⁵ 現地でアカ族が他民族との日常会話に使用する漢語はほとんどが方言であり、標準語のみを解して方言を解さない者はいないと考えてよい。標準語を話することができる者は、男女ともに 50 代以上ではほとんどおらず、40 代も一部の出稼ぎ経験者に限られるが、30 代以下の世代では多くなる。こうした世代差の一因は学校教育にあると考えられるが、学校教育を受けたことのない者にも標準語を話することができる者がいたので、彼らはテレビなどのメディアから標準語を習得した可能性がある。

ができない傾向が見られる。FQ13 は親が集落の入り口で経営する食堂でよく手伝いをしている。MD22 は漢族が多い専門学校を卒業し、その後 3 年間の兵役を終え、現在漢族の鉱業会社社長の運転手を務めている。この 2 人は特に日常的に漢族との付き合いが非常に多く、漢語を意図的によく使用している。この 2 人のように、基礎語彙においてアカ語で回答することができない事例も観察されるが、それは必ずしもアカ語の基礎語彙全体に対して漢語からの強い影響があることを意味しない。

表 3 アカ語で回答を得られなかった語彙のカテゴリー別の分布

	名詞												動詞	形容詞	副詞	挨拶語	その他	合計
	身体	食	居住	道具	交通手段	動物	植物	自然存在	親族	時間	数詞	代名詞						
カテゴリー計	49	10	7	18	2	25	13	28	17	16	17	24	152	56	8	2	56	500
FQ13	14	1	3	6	0	4	2	7	0	4	0	0	0	0	0	0	3	44
FB18	5	2	1	3	0	3	3	6	0	1	0	0	5	3	2	1	6	41
FP33	0	0	0	2	1	0	0	3	1	0	0	0	2	1	1	0	5	16
FT42	0	0	0	1	1	1	0	2	0	0	0	0	3	1	0	0	2	11
FA53	1	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	4	0	1	0	2	12
FJ66	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4
MW13	1	0	0	0	0	2	0	4	0	2	1	1	4	3	0	0	3	21
ME21	4	1	0	4	0	0	1	3	1	1	0	0	7	2	3	0	4	31
MD22	2	0	0	2	0	0	0	4	1	1	0	3	27	4	4	1	6	55
MG31	5	1	0	1	0	2	0	4	0	0	0	0	1	0	2	1	4	21
MX42	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	9
MI55	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	6
MM61	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	4
MS75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2

注 カテゴリー計は、500 の語彙のうち、各品詞項目に分けられた数を指す。

表 4 回答を漢語で行った語彙

記号	語彙	語彙数計
FQ13	毛、車	2
FB18	町、網、つぼ、車、色、週、さようなら	7
FP33	車	1
FT42	窓、町、池、海、週	5
FA53	粉、仕事	2
FJ66	弓、窓、車、仕事	4
MW13	胸、粉、壁、窓、車、	5
ME21	壁、窓、町、車、船、海、島、色、週、	9
MD22	窓、町、車、船、池、海、週、時間、吸う、投げる、割る、洗う、さようなら	13
MG31	粉、網、つぼ、屋根、窓、車、船、仕事、池、週、友達、祭り、町	13
MX42	色	1
MI55	粉、車、仕事、週、村	5
MM61	車、仕事	2
MS75	車	1

さらに、こうした語彙における漢語の借用について見てみよう。「アカ語で何というか」という質問に対して漢語で答えている場合、アカ語の基礎語彙の中に漢語の借用が見られることを指摘できる。前頁の表 4 と次頁の図 2 は、それぞれインフォーマントごとの漢語で回答された単語と、漢語で回答した人数を単語ごとにまとめたものである。

漢語の借用にはいくつかのパターンが見られる。まず、本来アカ語にはない語彙を漢語から借用する場合である。次頁の図 2 において、漢語による回答が多かった「窓」「週」「町」「海」は、本来アカ語にはないと考えられている語彙である。

まず、「窓」が漢語で回答されるのは、窓がなく、扉が 2 つあるだけのアカ族の伝統的な家の特徴を反映している。このため MS75 は質問に答えようとして、家屋に設置された開閉可能な板¹⁶を意味する *lalovssaq* で回答した。次に、「週」についてであるが、かつて村の人々は時間単位を表す「月」の下位の単位として、13 日を一つの単位とする *jaol nan* (いる 日) あるいは *nan jaol* (日 いる) を用いていた。これは現在村の人々が用いている 7 日を基準とする「週」とは異なる概念である。これに対し、一週間一回市へ行く、あるいは遠い所に行くという行為を表す *lai* から作られたと思われる、「週」*tiq laiv* (一 行く)、「毎週」*tiq laiv kaq* (一 行く 遠い) といったアカ語の表現もあるが、直接漢語を借用することも多い。

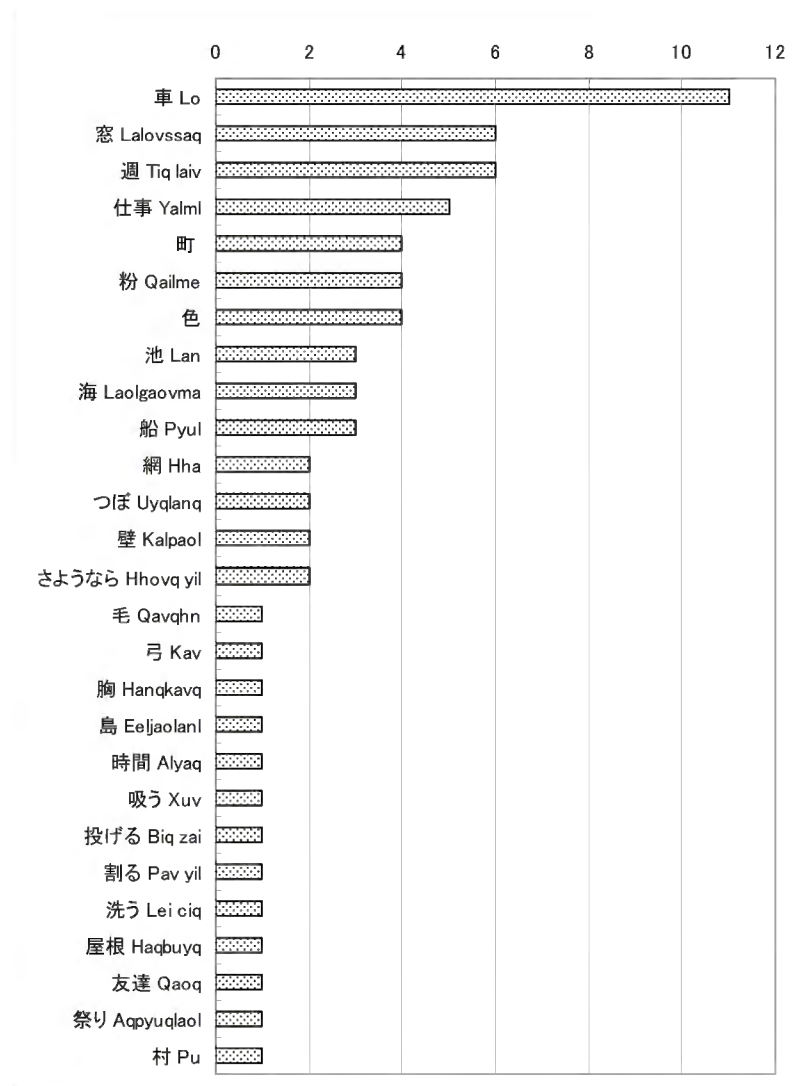
「町」も本来アカ語には存在しないと思われる概念である。アカ族にとって、集落を表す概念は、山と平地の中にある *pu* (村) しかなかったといわれている。このため人口が比較的多く、大規模な「町」のような語彙は形成されず、漢族との接触後にはじめてもたらされた可能性がある。実際に、1 人が漢語で「村」と答え、その他の 11 人が *pu* と回答している。最後に「海」についてであるが、アカ族は内陸に住むため、実際に「海」を見ることはできない。そのため、大きい河を表す *laolgaov ma* (河 大きい) と答えた人もいる。

もうひとつは、アカ語固有の語彙があるにも関わらず、現代的な意味にあわなくなったため漢語を借用するようになったパターンである。「車」は、MS75 をはじめ、11 人が漢語で回答した。アカ語 *lo*¹⁷で答える者も 2 人いた。*lo* はもともと馬、牛などを使った木製の車輪が付いている運送道具のことを指すが、

¹⁶ 換気や明かり取りにも使われることがあるが、日常的に開けられることは少ない。

¹⁷ インフォーマントによると、もともとはタイ語の *ล้อ* (*lo*) からの借用語で、アカ語として認識されるようになった語彙の一つであるという。言語調査票の回答語彙の中にもタイ語の影響を受けたものがあると推測できるが、これについては稿を改めて論じたい。

近代の自動車とは異なる。「船」も同様であり、アカ語の **pyul** は竹のいかだを指す。その意味を拡大して現在の船を **pyul** と答えた者は 3 人いたが、今の船と違うからといって、漢語の「船」を借用する者も 3 人いる。



注 各語彙についてアカ語の形式が得られた場合はそれを併記した。複数のアカ語の回答があった場合は代表的なものを記した。

図 2 単語ごとの漢語で回答した人数

他に、アカ語と漢語の概念の微妙なズレに起因するとみられる回答もある。例えば、「色」に関しては、**yaoba** (白)、**yaonav** (黒)、**yaoneil** (赤) など個別名があるが、これらを包括した「色一般」を指す固有の言葉がなかったため漢

語で回答されたと考えられる。また「網」については網一般を包括した言葉がないが、魚を取る網 *hha* などはある。「粉」も粉末一般を指す語彙がなく、米の粉を表す *qailme* があるのみである。また「仕事」では、会社等に勤めるという意味の語彙はなく、畑で働くことを意味する *yalmi* があるのみである。このため前者の意味では漢語を使用している。「さようなら」については、*Yil ma dei*、*Jaol yavq dei*、*Hhovq yil* など別れる際の状況によって、多様な表現がある。このため単に「さようなら」は何とどういうかという質問に対しては、漢語の「再見」による回答もあった。「再見」が学校で教えられており、実際に使っている者もいる。以上の分析から、漢語の借用が見られるが、これらの多くが元来アカ語語彙や表現にないことばであるか、あるいは本来のアカ語語彙が生活の変化につれて、現在と意味内容がかなり異なる場合に借用することが明らかになった。

例外的なものとして、人々が漢語の語彙をアカ語だと認識して使用する例が見られた。「鍋」(フライパン) に対して、14 人のうち 4 人は答えなかったが、6 人が *yaqgao* と答えた。アカ語の *yaqgao* は底が広く平べったい鉄鍋を指す。この言葉は、別のアカ族からの聞き取りによると、清朝末期以降西洋文化と共にもたらされた漢語の「洋鍋 (yang guo)」を語源としているという。それにも関わらず、回答した 6 人はこれをアカ語と認識して使用していた。*yaqgao* は、先に触れた語彙よりも借用された時期が古く、アカ語として定着していると考えられる。

以上で見てきたように、彼らの基礎語彙には漢語の影響が見られる。また、先述したようにほとんどの者が漢語の基礎語彙を解することも明らかになっている。したがって、アカ語の基礎語彙は比較的保持されており、漢語の浸透によってアカ語の存続が脅かされるという図式だけでは曼来村の言語状況を捉えるには不十分であることが明らかになった。以下では、より具体的な事例から、彼らの生活における漢語との接触とそれへの対応についてみていきたい。

2. 漢語の浸透とアカ族の対応

勐海県において、アカ族はタイ族に続いて 2 番目に人口の多い民族であるにも関わらず、町ではアカ語を耳にすることが少ない。町に在住するアカ族同士でアカ語を話している様子は観察できたが、病院や役所のような公的な施設(村の役場を除く)では漢語しか通用しない。このような生活環境において、漢語は不可欠な言語であり、必然的にある程度漢語が浸透しているといえる。

彼らの漢語の能力を支える要素として、まず学校教育の重要性を指摘できる。子供は生まれてからすぐにアカ語の言語環境において育てられ、アカ語が第一言語として習得される。小学校へ行くまでには、子供はテレビ、ラジオなどの

メディアを通して、漢語を耳にすることがあるが、話せる程度までにはならない¹⁸。その後 6、7 歳になると、小学校に入学し、漢語を第二言語として習得し、十分に話せるようになる。学校教育において、漢語教育が重視されているのは III 章で述べた通りである。

その一方で、漢語教育を受けていない世代の人々でも、ある程度の漢語能力を持っていることが観察される。人々が漢語を使う大きな機会として、市場での活動が挙げられる。市場には、漢族、タイ族、アカ族、プーラン族など多様な民族が訪れる。これらの人々の間では、漢語の方言が共通語となっている。集落から一番近く便利なのは西定の市である。西定には病院、郵便局、銀行もあるため、人々はこれらの機関を利用するときにも訪れる。また日用品を購入すると共に、村でできた農産物を売ること、現金収入を得る場でもある。

以下に示す事例は、2005 年 8 月 14 日に市場に野菜を売りに来た集落の 6 人の女性のうち hi¹⁹（女性、50 代）が他民族の客（女性）に應對しながら、会話をしている場面²⁰である。会話には、同じ集落のアカ族の ci（女性、50 代）も加わっている。ローマ字表記と和訳の下線を引いた部分がアカ語であり、ここではほとんどの場合女性は漢語²¹を使って商売をしていることが読み取れる。

＜事例 2：アカ族の女性と他民族の客との間での商売の成立＞

発話者	原語	和訳
①客→hi	多少钱？	いくら？
②hi→客	八角。	8 角。
③客→hi	七角卖了？	7 角で売ってくれる？

¹⁸ 筆者が村で 4、5 歳の男児二人と会話した際、まずアカ語で話しかけられた。それに対して、「私は漢族で、アカ語ではわからないので、もう一度漢語で教えて」と漢語で答えると、二人は恥ずかしそうにしながら、アカ語で「教えない」と答えた。そしてアカ語で「どこへ行くの？」とたずねてきた。他の機会に同じ男児達と会話したとき、筆者の漢語での質問に対して、この男児達の姉が「彼らは漢語でどういえばいいのかわからないのよ」と話しかけてきたこともあった。このように、幼い子ども達はアカ語を第一言語とし、すこし漢語を聞き取る能力があっても、話せるまでには至っていないことがわかる。

¹⁹ 以下では、言語調査票のインフォーマント以外の人物を、実名のピンイン表記の頭文字によって示す。

²⁰ 以下、本論での事例の表記法は好井ほか（1999）を参考に次の通りとした。例えば A と B の 2 人による会話の場合、基本的に各々の発話を一つの記述単位として、会話の流れに沿って記述する。ただし、同時発話が見られた際には、分析の便宜上、発話の重なりは無視する。すなわち、A の発話が B と重なる場合でも、A と B の発話内容を分けて、先に発話した方から記述する。また、3 人以上の会話で、ある話し手が話しかける相手を切り替えながら話している場合は、相手ごとに発話を分けて記述する。

²¹ 以下、本論文で取り上げる事例の中で話されている漢語はすべて現地の方言である。

④hi→客	<u>Ngel ngaf lol, aqbul-ol.</u>	<u>(8 角で) 買っても損しないよ、お姉さん。</u>
	【客は意味が分からなかったよう うで】	
⑤客→hi	不売？七角！	7 角で売らないの？
⑥hi→ci	(・・・:) 五斤 <u>nal-aq</u> , 八角 <u>Almiav ni-a?</u>	(・・・:) 5 斤なら、(1 斤) 8 角 <u>でいくらになる？</u>
	【hi は隣にいたアカ族 ci に聞く が、返事はなかった。この間、客 は勝手に商品を秤に載せた。】	
⑦hi→客	<u>Maqngel. 零钱Anl ma-aq aqbul, 零钱Anl nal-a yiul-ao.</u>	<u>(7 角では) 売れないよ。あなた は小銭を持っている？小銭があ るなら持って帰りな。</u>
	【客はまた hi の話が分からな かったようで】	
⑧客→hi	来称下，这个。	これを量ってみて。
	【hi は妥協して量る。】	
	【女客は量ったのを見て、大きい お金を hi に渡す。】	
⑨hi→客	小小的那个不有？	細かいのがないの？
	【仕方なく、そのまま 7 角で商売 成立】	

注 ⑦hi の発話内容は、小銭があれば売るつもりということである。

この事例は 10 分間の短い時間ではあるが、この間に hi はアカ語と漢語とを切り替えながら、客に應對している様子が分かる。④のように漢語を話すべき時に、アカ語で話してしまうような混乱も見られるが、商売に必要なコミュニケーションをとることは可能であることが分かる。成人の女性たちに対して、学校で習ったこともないのに、なぜ漢語ができるのかという質問について、FA53 は、アカ以外の人々との交流における必要性を次のように語る。

「買い物しに行くとき、アカ以外の人には漢語を話さなければならないじゃない。勐遮²²、嘎拱²³、西定の市に、物を背負って売りに行くときには、漢語を

²² 曼来村から約 20 キロ離れたタイ族が多い町である。

²³ 曼来村から 9 キロ離れているタイ族の村落である。

使うじゃない。どこで習ったって？他の人たちが話しているのを聞いたりしてね、ハハハ」

また別の女性も、「漢語を話せると、いいよ。漢語を話せなかったら、嘎拱、勐遮、勐海の市には行けないよ。人があなたに尋ねたら、あなたはどやって答えるの？彼らはアカ語を知らないからね。」と語る。このように、市場が彼女たちにとって漢語を話す重要な機会になっていることがわかる。

一方、男性は市場での活動に加え、日常生活でも他民族と接触する機会がある。集落では、客が来たときや、他の家との付き合いなどで、男性が女性よりも表にたつことが多いからである。男性の活動は女性に比べて幅広く、必然的に漢語を話す機会も多くなる。du（男性、40歳、アカ族）は、漢族との日常的な交流の多さを次のように語る。

「今年の正月に、漢族の友達を25人も家に招待した。友達だから、たまに話をしたいからね。その中、帕蚌の漢族が19人、勐遮の漢族が6人いた。勐遮の漢族は昔部隊で知り合った人で、今勐遮の農場で働いている。一年に5、6回遊びに来ているが、私も一年に10回ぐらい遊びに行っている。帕蚌の漢族は、すぐ隣の集落だからすぐ知り合いになれるよ。」

男性にとって、村の内外で知り合った友人との付き合いが漢語を話す重要な場になっていることが分かる。村外では、学校や出稼ぎ先で知り合うこともよくある。彼らは祝日などに村外の友人を招待し、また日常的に、男性漢族やタイ族の住む所に遊びに行くことが多いという。

こうした特徴を、集落の男性kh（男性、30歳）と女性FA53の行動パターン²⁴から検証してみよう。khは集落のほとんどの人々と同じように、家族で農業を営んでいる。近年トラクターを購入して運搬に使い、家族や親戚と畑、町へ行く交通手段にもなっているという。トラクターの移動中に同じ集落の人々を乗せることも多い。彼の行動には、集落の中年男性の一般的な行動パターンが見てとれる。khの4日間に会った人数は家族を除き、少なくとも58人、そのうち漢族は10人以上いて、彼らと漢語で話した。家と畑や町など、頻繁に移動をし、毎日漢語を話す機会があった。彼が会った漢族は、友人や仕事上の付き合いのある人々であり、それぞれと比較的長時間かつ多様な内容の会話をしている。それに比べ、FA53の行動は非常に単純である。家と畑の往復や週に1度の市場だけである。彼女のように、結婚した女性はあまり遠出することがなく、農作業や家事、子育てをし、夫を支えるという傾向が強い。FA53が4日間で、会った人は58人、そのうち漢族は6人であった。男性に比べて、会っ

²⁴ 2005年8月20日から8月23日までの行動を記録した。

た人々の総数に占める漢族の割合は大きいものの、彼らは市場で野菜などを売る際の客であり、漢語では簡単な商売上のやりとりしかしていない。集落の女性には男性に比べて行動範囲が狭く、漢語を話す時間も少ない。

以上より、集落の人々は閉鎖的ではなく、常に積極的に漢語を媒介とする付き合いを行っていることが示された。市場は唯一の漢族との接触の場ではなく、特に男性は日常的に漢族との付き合いが多い。男女の差があるにしても、このような環境が彼らの漢語とアカ語の二言語状況を支えていることが明らかになった。

V 日常生活におけるアカ語の使用状況

1. アカ語話者同士の会話場面における特徴

まず、集落で最も一般的に行われている会話の事例として、アカ族のアカ語話者同士の会話場面を取りあげる。会話では、自然に漢語が借用されていることが観察できる。

登場人物は FT42（女性、42 歳、アカ族）、do（男性、33 歳、アカ族）、FP33（女性、33 歳、アカ族）の 3 人である。FP33 は do の妻である。

以下の会話は、2005 年 6 月 19 日の夜、FT42 が近所の do 夫妻の家に遊びに来て、かまどを囲んで 3 人で FT42 の次男の就職先について話している場面である。ローマ字表記がアカ語の部分で、下線を引いた語彙は漢語である。

<事例 3：アカ語話者同士の会話>

発話者	原語	和訳
①FT	Sal Paiq nan <u>星期三</u> Hyul hhaq <u>糖厂</u> bihao lei-e, <u>老二</u> Te hhaq maq yil maovq nia jeil <u>老二</u> Aq gal yil lei dul <u>江苏</u> lei lei hyul-aq.	あさって <u>水曜日</u> にあの <u>砂糖工場</u> に 見に行ってみるが、 <u>次男</u> があまり 行きたくなさそうだ。どこへ行く (と聞いたら)、 <u>江蘇省</u> へ行くと <u>次</u> <u>男</u> が言う。
②FP→FT	Aq jeiq janl lei?	何をしに行く？
③FT→FP	Aq sul-aq siq nia-a. <u>糖厂</u> bai hhovq lei lei, aq yaovq-e aqhhaol pal dov lei. Ail naiq jil maq jeil hyul-aq, <u>农作物局</u> bai jeil hyul-aq.	そんなの知らないよ。彼のおじさ んも「 <u>砂糖工場</u> を見に行きなさい。 すでに <u>農産物局</u> に伝えておいたか ら。」と言っていたよ。
④FP→FT	Maq gaq-eq ngal.	私は聞いていなかった。

⑤do→FT	<u>糖厂</u> ?	<u>砂糖工場</u> ?
⑥FT→do	<u>糖厂</u> . Aqqaoq hyul gal jaol-yil maovq-a lail pal xaq-ail. Maq jaol-yil maovq-e lail Almeeq <u>老</u> <u>二</u> jaol niml.	<u>砂糖工場</u> . 他の人はいそこに行き たがっている。 <u>次男</u> は行きたくな いというし、どうしよう。
⑦do→FT	<u>糖厂</u> Maq gal ni meeq mai ail maiq haoq.	<u>砂糖工場</u> はとてもいいところだと 聞いた。

ここでは漢語から借用されている語彙は多岐にわたる。時間名詞では、発話①で「星期三」(水曜日)が借用されていることが観察できる。アカ族はもともと十二支による暦を使用しており、曜日を基準とした西洋的な暦は使用していなかった。中華人民共和国成立後に漢族からの影響で漢語を借用するようになった。またIV章第1節での言語調査票の分析から、「週」という言葉には、人々はほとんど漢語の「周」か「礼拜」を借用していることが分かる。

次に発話①、⑥における親族名詞の「老二」(次男)の使用を見てみよう。「次男」はアカ語では aqhhanl と呼ばれる。FT42 や周りの人々は皆 FT42 の次男を漢語で「老二」と呼んでいる。これは、FT42 の家に夫の仕事の関係で漢族の出入りが多く、次男のことを「老二」と呼んでいたため、その呼び方が広がったという。したがってこれは FT42 の次男に限った特殊なケースであり、一般的に「老二」という漢語が使われるとは言えない。

この他にも、発話①における「江苏」(江蘇省)は漢族地区の地名である。発話③における「衣物局」(農業局)は中華人民共和国成立後にできた政府機関名の固有名詞である。発話①、③、⑤、⑥、⑦では「糖厂」(砂糖工場)が使用されている。アカ語では「砂糖」を paoqqyul と呼ぶが、「工場」のような漢族がもたらした近代的施設を示す語がアカ語にはない。したがって、単に「砂糖」

「飴」を指す時には、人々はアカ語の paoqqyul を使うが、「砂糖工場」を指す時には、漢語の「糖厂」を借用する。

こうした借用を除いては、アカ語話者は固有語を使用して日常会話を行っている。ある言語において他言語の過剰な借用が起きると、言語使用のバランスが崩れ、それが言語体系全体の不安定化を起こすことがあるとされるが(アジェージュ 2004)、この事例にみる借用はアカ族の人々の知らなかった概念を指す言葉がほとんどであり、アカ語の基礎語彙に影響を与えるまでには至っていないことが観察される。

FT42 の次男に対してのみ特殊な使い方をされる「老二」(次男)を除いて考

えると、事例に登場する借用語はすべてアカ語にもともとなかった、あるいは意味合いがずれているものであった。漢語を借用しても、漢語に乗り換えようとする態度はまったく見えず、それをアカ語の文法構造に取り入れて、アカ語として使用する傾向が見える。こうした傾向は、コリヤーク族の間でのロシア語とコリヤーク語との関係においても報告されている (Kurebito 2004)。固有の語彙と漢語の語彙を用いて新しいアカ語の発話をつくるプロセスが、彼らの日常の言語実践の中から推測できる。

アカ語の使用に関しては、集落ではアカ語を話すのが当たり前だと考える人が多い。例えば my (男性、21 歳、アカ族) は「アカ語で話すのに慣れているから、もちろんアカ語を話す。なんで漢語なんか使うの?」と語る。こうした語りの一方で、アカ語という枠組みの中で自然に漢語語彙を取り入れて不足を補っているともいえる。

2. 他民族が参加した会話場面にみる特徴

2-1. 漢族が参加した会話にみる言語の切り替え

前節で見たようなアカ族同士の会話だけではなく、彼らは日常的に他の民族とも接する機会がある。また彼らを取り巻く言語環境において漢語が重要になっていることも指摘できる。IV 章第 1 節における言語調査票を用いた分析の結果からも、彼らの漢語能力が高いことが分かった。このような環境に対して、努力して漢語能力をつけようとする人もいる。さらに、IV 章で述べたように、集落の中でも特に男性は漢族との付き合いが多い。以下の事例ではそうした付き合いの場面における言語使用の特徴を明らかにする。

登場人物は qi (男性、49 歳、アカ族)、ed (男性、30 代後半、アカ族)、so (男性、30 代後半、アカ族)、aa (男性、30 代前半、漢族) の 4 人である。qi は曼来村役場の書記であり、ed は村の会計係を担当している。また、so は曼来村の村長である。aa は西定に在住しており、トラクターの運転手をして、集落の人と知り合った。漢族であるが、以前よく qi の家に泊めてもらっていたので、簡単な日常会話程度のアカ語は聞き取れるという。

以下の会話は、2005 年 5 月 25 日夜、qi の家で行われた。まず、スモモの生長について話が展開していく (① - ⑦)。次に果実の実りににおける雨水の重要性をめぐって話が進む (⑧ - ⑭)。最後に話が一転して、aa の仕事に関する話に進んだ。ローマ字表記と和訳で下線を引いた部分がアカ語である。そして言語の切り替えが起こっている部分を太字で表す。さらに会話に参加した人物の使用言語の種類と発話回数を表 5 にまとめた。

＜事例 4：漢族が参加した日常会話＞

発話者	原語	和訳
①ed→so	长势相当好，快了吧。	生長の勢いがとっても良いから、もうすぐだろう。
②so→ed	<u>Aovq-al nal-aq aqgal-yil pi-e qan nia he.</u>	<u>熟したら、どこにでも背負っていきよ。</u>
③ed→全員	他们那个李子树也一样。像我们这个，{去嫁接那个桃子树那个，嫁接了就结了。	彼らのスモモの木も同じだ。私たちのスモモのように、{桃の木と接木をすると、すぐに実がなった。
④qi	{象今年他们卖的那种，樱桃那种，好吃那种。	{今年彼らが売っている品種のような、桜桃の品種が、美味しい。
⑤aa	比这个一个样。桃子会死那种。	これと同じだ。その品種の桃が死んでしまう。
⑥qi→aa	呃，吃嘛有点桃子味道，这种。那种可以。	結構美味しいね、その味、その品種がいい。
⑦ed	<u>Eq eq.</u>	<u>うん、うん。</u>
⑧so→ed	傣历年 <u>Bai piav anq jeiq aqjeiq-anl bi jav-e lail ail naiq maq aovq lal-aq siq lail ail naiq. Hyul niiq nan smq nan kaq-anl taivf aovq buvq jil nai ga piaiv nia hyul.</u>	<u>タイ族の正月になぜ採って売りに行かないのと言ったら、まだ熟していないと教えられた。二三日しか経ていないのに、くさっちゃった。</u>
⑨ed→全員	这个李子就主要在于那个雨水，那个水分相当关键，我家那个，我家那个地棚那里，前个月，八月，下了两场雨，熟起来了、（・・・：漢語）拎着摘了去卖。从那个以后雨水就突然断了。一直那样旱着在了。还是那种在了。	主に雨だね。水分がとても重要だ。うちのあの、うちのあの畑小屋のほうに、先月、8月に二三回雨が降って、熟しだした。（・・・：漢語）選んで取って売りに行った。それから、雨が突然止んだ。ずっと乾燥していた。そのままにしておいた。
⑩ed→so	<u>Aqmanl-ol! Hyul nai tiq pov piav-al nai tiq siq tov maq anq hyulgal jav mai.</u>	<u>なんてこった！最初一回売って、その後一つも売りに行っていない。まだ熟していなかった。</u>

⑪so→ed	(・・・:アカ語) <u>Maq caq ail maq ngel-a lol? Nga mavq pu anq jil maiq maol.</u>	(・・・:アカ語) 違うでしょう？ <u>私たち集落のはもう売り終わった。</u>
⑫ed→全員	春果这个是水分相当要紧，春果这个。还不是都一样，哪个都渴水，植物和动物不会说话。性质都有点像啦。这是我的研究。为什么今年种桃李五月底。我想想曼来这个地方（・・・:漢語）	春の果実に水分がとっても大事な。すべて一緒だ、誰でも水をほしがる。植物と動物が話せないだけ、性質は同じだ。これは私の研究である。どうして今年5月末に桃、スモモなど植えたのか。曼来村この村は（・・・:漢語）
⑬so→ed	<u>Mil nan jil</u> 收 <u>lal-aq siq.</u>	<u>昨日スモモを一回集めに行ったよ。</u>
⑭ed→全員	呃，如果大雨不再下嘛，它嘛，等到6月份中旬还是不会落。可能有点还是难得说嘛。里面更不要说，水分不够。如果是从昨天今天以后下那个雨水来说掉，我们这个雪李马上能出了。下晚点早就摘完掉啰，没有了。我家那个板栗还在小小的，象这种样的。本来七月份是打算要卖了，不过七月份继续没有雨水，还可能难得说，不得卖。结的果也小。	うん、もしまだ雨が降らなければ、スモモなどが6月中旬になっても熟さないとはいえなくもない。その中（山の奥のほうにある畑）は言うまでもなく、水分が足りない。もし昨日か今日から雨が降れば、私たちのスモモがすぐ熟すだろう。もっと雨が遅れて降れば全部収穫しちゃったのに。うちの栗がまだ小さくて、こんななんだよ。もともと7月に売るつもりだったが、7月になっても雨がまだ降らないから、これじゃ何とも言えない。売れない。実も小さいし。
⑮aa→ed	一小口喝掉。	一口だから飲んじゃって。
⑯so→aa	这两年嘛比以前开拖拉机的时候赚多了。	この二年間、以前トラクターを運転していた時よりずっと稼げているね。

注 ③と④の { 以降の部分は同時発話である。

表5 各発話者の言語使用状況

人物	民族	発話回数計	アカ語発話	漢語発話	漢語借用を含むアカ語	言語の切り替え回数
qi	アカ族	2	0	2	0	0
ed	アカ族	7	2	5	0	1
so	アカ族	5	2	1	2	0
aa	漢族	2	0	2	0	0

注 1) 切り替え：話し手が自分の継続した発話の流れの中で、次の発話に入るときにコードを変えることを、ここでは一つの切り替えと計算した。

2) qi は日常生活においては、アカ語を使用しているが、このデータの中では、aa に対する発話だったため漢語を使用したと考えられる。

ここでのアカ族の発話者はアカ語と漢語のバイリンガルであるが、まず ed の発話の⑨と⑩におきた言語の切り替えに注目する。⑧で so はアカ語で果実の熟していなかった経験を述べる。ed はそれに対して、⑨で漢語に切り替えて、同じく熟していなかった自分の家の話を取り上げて、水分の重要性を説明する。ここで彼は、アカ語だと、漢族である aa に通じないという意識があり、aa を含めた全員に伝えるために漢語で話したことが観察できる。しかし、⑩では Aqmanl-ol というアカ語の感嘆語を口にして、またアカ語に切り替えた。ここでは、彼は強い口調でまだ果実が熟していなかったという事実を、⑧で発話した so に対して訴えた。

so が漢語を理解できるにも関わらず、ここで ed がアカ語に切り替えたのは、aa に会話の内容を知られたくないか、あるいは so とは普段アカ語で会話しているためその方が明確に内容を伝えられる、といった判断によるものだと考えられる。ここでの内容は特に秘密とするものでもないで、後者の可能性が高い。これらから、相手がアカ族であるか、漢族であるかを自然に区別して、使用言語を切り替えていることがわかる。

次に、so の会話に出てきた2つのポイントを見てみよう。まず、so の5回の発話のうち、漢語語彙の混在を含めて4回はアカ語で、1回だけが漢語であった。より詳しく見れば、アカ語発話のすべては ed を対象にするものであることが分かる。この段階では、so はアカ族の仲間と共有する栽培知識と一緒に話し合うことができた。⑩から一転して漢語を使ったのは aa との会話であり、aa の仕事に関する内容であった。so が彼とコミュニケーションをとりたくなったため、あるいはこれまで会話の輪から疎外されていた彼に気を使って切り替えたことが伺える。

次に、so が⑧と⑬の発話で行った「傣历年」「收」という漢語の借用を見て

みよう。「傣历年」とは、タイ族の暦法での新年を指す漢語であり、かつてタイ語の語彙を使用していたが、近年人々はほとんど漢語を使用している。また「收」とは、漢語で「集める、収穫をする、仕入れる」などを指す動詞であるが、アカ族は商売を目的とする収穫を表す時に、この「收」を借用する。

以上より、アカ語会話の中にも前節で見たような漢語の借用が見られると共に、会話の相手に応じて発話が柔軟に切り替えられていることが観察された。ただし、漢族が会話に参加した場合でも、アカ族同士ではアカ語を好んで使用する傾向が伺える。村外に出稼ぎに行っているあるインフォーマントは、「出稼ぎ先では、もちろん漢語を使い、アカ語を使わない。家に帰って来て、アカ語を話すときが一番いい。漢語では話す前に、まだすこし言葉の意味を考えなければならないが、私たちの民族の言葉話すなら、何にも考えなくていい。いつも使っているから、慣れている。」と語る。この語りからも、生活の中で漢語は欠かせないものになっているが、依然として彼らにとってアカ語が第一言語であることがわかる。

2-2. タイ語母語話者の参加した会話にみるアカ語の役割

漢族に加えて、アカ族と歴史的にも重要な関係にあるのがタイ族である。かつてこの地域ではタイ族の統治の下で、民族間共通語としてタイ語がよく使用されていた。しかし共産党の統治が始まった 1950 年代以降、漢族の流入に伴って共通語の地位は漢語にとって代わられている。以下では、タイ族とアカ族の会話がいかに行われるのか、そしてその中でアカ語がどのような機能を果たしているのかを見ていきたい。

以下の事例の登場人物は **mi** (男性、35 歳、タイ族)、**ac** (女性、30 歳、アカ族)、**zn** と **er** (男性、アカ族) の 4 人である。**mi** はアカ語をまったく話すことができない。妻はアカ族であるが、親族に心身に障がいを持つ者がいるため、集落では結婚対象から排除されている²⁵。彼らは集落で唯一、アカ族とタイ族が結婚したケースである。**ac** は集落の小売店の経営者である。2005 年 8 月 22 日の夜 (19 時ごろ)、小売店に缶詰の肉を買いにきた **mi** に対して、店の前にいた男性たちがからかう場面である。下線を引いた部分が、アカ語を使って **mi** に分からないように **mi** をからかっている箇所である。

²⁵ 一般的にアカ族では、障がい者を抱える家族との結婚は忌避される。

＜事例 5：タイ語母語者の参加した日常会話＞

発話者	原語	和訳
①mi→ac	哪样好吃点, 那个? 红烧的 没有啊?	どっちのほうがおいしい? それ? 醤油煮込みのないの?
②ac→mi	红烧有嘛。	醤油煮込みのあるよ。
③mi→ac	拿来一瓶。	一つちょうだい。
④zn→y	<u>Kovlkov dalhovq bai laol</u> <u>naiq-ail hhai-e jeil nga nimf</u> <u>qivq-aq.</u>	<u>今晩は猫背にご馳走するんだ。</u>
⑤er→x	Qail yaiq-a lol?	米の収穫に行くの?
⑥er→y	Xaqjil hhel naf hanq-anl bi yu-aoq nil.	お肉を買ったらよかったのに。

注 1)猫背と呼ばれる人物は身体が不自由で、miの義理の兄である。

2) y はその場にいるアカ族の全員を指す。

3) x は通りかかった集落の人（アカ族）である。

以上の事例では、次の 2 点の特徴が見られる。第 1 点は、ac と mi との会話が漢語で行われていたことである。この地域における民族間共通語が、漢語に変化していることがうかがえる。この事例では 30 代のタイ族と 30 代のアカ族が漢語を使用していることから、比較的若い世代では漢語が共通語として定着していることがわかる。

第 2 点は、集落のアカ族同士は日常的にアカ語を用いて雑談している点である。更に、彼らはアカ語が分からないmiをからかってアカ語を秘密語として使用することによって（発話④）、会話の場においてアカ族としてのつながりを作りだし、タイ族を他者化していることがわかる²⁶。

²⁶ 他民族を会話の中で他者化することは、漢族に対してもみられる。筆者の記録した会話の中でも、アカ族が漢族に対し「あなたたち漢族は～」と前置きして漢族の習慣や考え方に言及する例が見られた。また、筆者は曼来村の観察において、「2005 年 6 月 14 日午前・・・漢族の女性が小売店の前を通った。みんなはまたその女性について、まず aqkaqssaq（アカの人）か、lavqbee（漢族）であるかどうかについて話題にした。・・・」と記録している。このように、曼来村のアカ族は日常的に、lavqbee（漢族）という表現で、漢族をアカ族とは別にカテゴライズしている。

VI おわりに

本論文はアカ族の言語使用の実態について、以下のことを明らかにしてきた。まず、政府はアカ語の正書法を定めるなど、政策上では少数民族言語を重視する体制を取っている一方で、学校教育の現場においては、事実上漢語重視の教育が優先される現状が明らかになった。

次に、言語調査票の調査結果から、彼らがアカ語の高い能力を持ちながらも、漢語能力も持つバイリンガルであることが明らかになった。彼らの使用言語には漢語の影響が見られるが、現状では、それによってアカ語の基礎語彙の存続が脅かされるとは言えない。更に、アカ族の集落は閉鎖的ではなく、人々は常に積極的に漢語を媒介とする付き合いを行っていることが示された。男女の差があるにしても、このような日常的環境が彼らの漢語とアカ語の二言語使用状況を支えていることが明らかになった。

一方、日常生活における実際のアカ語を使用する会話場面からは、漢語の借用がありながらも、アカ語を圧倒的に使用している姿が明らかになった。また、高い漢語能力を身につけていると同時に、アカ語との柔軟な切り替えを行い、漢語は必要な時の手段とみなされていることも明らかになった。さらに、アカ語が他民族との会話の中で秘密語として機能していることも観察された。

彼らがアカ語と他の言語を、文脈に応じて使い分けることが、アカ語の保持に繋がっている。一方でそれは、彼らがアカ族であるという意識にも繋がっているとと言えるだろう。彼らが多言語状況の中でアカ語を使うということによって、アカ族としての連帯が意識させられるからである。

こうした状況が続くかぎり、アカ語は一定の水準で維持される可能性を示す。日本のアイヌ語の事例のように、長い時間を経て、バイリンガルから優勢言語のモノリンガルへとシフトした事例もある (Yamada 2005: 209-210)。今後アカ族自身が言語の維持にどのようにかわり、アカ語の状況にどのような変化がもたらされるかが、民族情勢が常に変動する中国において重要な研究課題となっていくことだろう。

参考文献

[日本語]

アジェージュ, クロード (2004) 『絶滅していく言語を救うために—ことばの死とその再生』 糟谷啓介 (訳)、白水社. (原著 Hagège, Claude (2000) *Halte à la mort des langues*. Paris: Odile Jacob.)

岡本雅享 (1999) 『中国の少数民族教育と言語政策』 社会評論社.

崎山理・宮岡伯人編 (2002) 『消滅の危機に瀕した世界の言語とことばと文化の多様性を守るために』 明石書店.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (1966) 『アジア・アフリカ言語調査表 (上)』 アジア・アフリカ言語文化研究所.

中川裕 (1996) 「少数民族と言語の保持」 宮岡伯人編 『言語人類学を学ぶ人のために』 62-92、世界思想社.

西田龍雄 (1988) 「アカ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 『言語学大辞典』 第1巻: 137-142.

長谷川清 (1998) 「国境を越えるネットワークとエスニシティの動態—雲南省・シプソーンパンナー, タイ・ルーの事例から—」 『東南アジア研究』 35 巻 4号、14-37.

ミルロイ, レズリー (2000) 『生きたことばをつかまえる—言語変異の観察と分析』 太田一郎ほか (訳)、松柏社. (原著 Milroy, Lesley (1987) *Observing & analysing natural language: a critical account of sociolinguistic method*. New York: Blackwell.)

毛里和子 (1998) 『周縁からの中国: 民族問題と国家』 東京大学出版会.

好井裕明・山田富秋・西阪仰編 (1999) 『会話分析への招待』 世界思想社.

早稲田みか (1989) 「民族接触と言語取替え—ハンガリー語の語彙に見られる民族接触の足跡—」 北方言語・文化研究会 (編) 『民族接触 北の視点から』 323-333、六興出版.

[中国語]

戴慶厦・段昶樂 (1995) 『哈尼語概論』 昆明: 雲南民族出版社.

菅開榮 (1998) 『西双版纳傣族自治州教育志』 昆明: 雲南民族出版社.

黄行 (2000) 『中国少数民族言語活力研究』 北京: 中央民族大学出版社.

景洪県地方誌編纂委員会編 (2000) 『景洪県志』 昆明: 雲南人民出版社.

門図 (2002) 『西双版纳愛尼村寨文化』 中国文学出版社.

西双版纳傣族自治州教育委員会編 (2002) 『西双版纳少数民族』 昆明: 雲南美

術出版社.

徐世璇 (2001) 『瀕危語言研究』 北京：中央民族大学出版社.

楊沢華 (1995) 『哈尼文課本』 昆明：雲南民族出版社.

楊忠明 (2004) 『西双版纳哈尼族簡史』 西双版纳傣族自治州政治協商委员会提案法制委员会.

雲南省編集委员会 (1982) 『哈尼族社会歴史調査』 昆明：雲南民族出版社.

雲南省勐海県地方誌編纂委员会編 (1997) 『勐海県誌』 昆明：雲南人民出版社.

中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委员会文化伝司 (1993) 『中国少数民族言語文字使用和发展問題』 北京：中国藏学出版社.

[英語]

Kurebito, Megumi (2004) Incorporation as a Linguistic Identity in Koryak. In *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), Takashi IRIMOTO and Takako YAMADA (eds.), pp. 279-291. Osaka: National Museum of Ethnology.

Laponce, J. A. (2005) Minority Languages and Globalization. In *Language, Ethnic Identity and the State*, William Safran and J. A. Laponce (eds.), pp. 15-24. London: Routledge.

McKinnon, John (1997) Editorial: Convergence or divergence? Indigenous peoples on the borderlands of Southwest China. *Asia Pacific Viewpoint* 38 (2): 101-105.

Yamada, Takako (2005) Language and Rituals of the Ainu in Contemporary Japan. In *Shamanhood: an endangered language*, Juha Pentikäinen and Péter Simoncsics (eds.), pp. 207-218. Oslo: Novus Forlag.

中国云南省西双版纳少数民族语言的维系 —阿卡族村落语言使用的现状—

陈 畅

要旨

本研究是作者从 2004 年到 2006 年之间田野调查所得出的成果。作者着眼于中国云南省西双版纳少数民族—阿卡族的语言实践的现场,针对阿卡族语言使用的现况进行了探讨。首先,作者通过对阿卡族学校教育的实地调查,指出现情况下汉语教育较少数民族语言教育受重视的实际情况,并基于语言调查表的问卷调查结果,阐明阿卡族既保持很高的阿卡语基本词汇能力,且拥有较高的汉语双语言能力。接着,作者对阿卡族日常生活的会话场面进行分析,指出他们在日常生活中频繁地使用阿卡话的同时,根据需要灵活地转换使用汉语和阿卡话,使其母语得以保存。通过以上讨论,作者初步阐叙了在中国西南部多语言的环境下,少数民族语言得到维系的现况。

关键词：多语言环境、双语现象、日常会话、少数民族、阿卡族

(受領日 2009年6月30日)
(受理日 2009年10月13日)